

相模女子大学生の可能性と限界

湧 口 清 隆

1. 女子大学の存在意義

相模女子大学は前身である1900年設立の日本女学校から数えて124年を迎える。この間、女性をとりまく社会環境は大きく変わり、少なくとも法律上は男性と女性との間に権利や義務の差はほぼなくなった。しかし、年金制度や税制を見る限り、必ずしも男性が扶養者、女性が被扶養者とは明記されてはいないものの、社会慣習や実態を踏まえると暗黙上の男女間格差は存在しているし、生物学的に見ても男性と女性との間には身体的な違いが存在している。これらの点を踏まえると、女子だけを対象として教育する女子大学の存在意義は今なおあるであろうし、今後もあり続けると考える。出産や育児など、どんなに男女間の役割を変えたいと思っても、身体的な性別を変えない限り、役割を変えることは困難である。それにもかかわらず、性差は存在しない、男性も女性も同じだと唱える主張は、自然を冒涇するものであり、個人的には受け入れられない考え方である。

尤も、私個人は身体の性と心の性との違いを持つ者を受け入れない訳ではないし、性転換を認めない訳でもない。多様性を認める現代だからこそ、両者の不一致や性転換者の存在を受け入れるべきだと考えている。

さて、問題は多様性を前提として女子大学にどこまでの「女性」を受け入れるべきかという点である。この問題が最も顕在化するのは、トイレや更衣室など性別により利用者を区分している施設の利用問題である。この問題は、喫煙・禁煙問題と同様、相互性があり、片方の権利や主張を認めると、他方の権利や主張が侵害される典型的な事例である。法律上、性別が明確に定義されていれば議論の余地はないが、そうでない場合には、身体的もしくは見た目の性別か、自認する性別か、どちらの基準に基

づくのかは、コンセンサスの問題、経済学的により正確に言えば、どちらの基準を採用する方が、その組織の構成員がより高い満足を得られるのかにより決定するしかない。Coase, H.R. (1959) (1960) が意図する意味での「コースの定理」の帰着である（取引費用がゼロの世界では、当事者間で取引が行われ、あらゆる財は最も価値の高い利用がなされるが、取引費用が存在する場合には実現しない利用法が生ずる）。この結論を受け入れられない者は我慢するか、Tiebout, C. (1956) のいわゆる「足による投票」の概念に基づき、他へ移動するかのいずれかを選択しなければならない。これは大学の経営問題にまで発展する。

2. 相模女子大学の学生

相模女子大学で学ぶ多くの学生の特徴は、純粹でまじめ、おとなしく、マイペースで、他人を押しつけて自分だけのし上がろうとしない点にあるように見受けられる。だから、競争環境を前に自信を失ってしまい、決して無理をしない、自ら身を引いてしまう。これらの特徴は、闇バイトや投資詐欺、新興宗教に巻き込まれることが少ないという点で良い方向に作用している。一方で、新たなことや一見難しいことにはチャレンジしないという点で悪い方向に作用してしまう。大変なことに直面すると、最初は我慢して頑張るけれども、しばらくすると、自分から何々したいとは切り出すことなく、「自分には無理！」と言って身を引いてしまう。この点が学生の教育を難しくしている要素である。とくに、学生の学力差が大きく開くなかで、学力的に上に合わせても下に合わせても真ん中に合わせても、一定数の離脱者が出てきてしまう。そのため、離脱者を減らすためには、少人数教育でできるだけ一人ひとりにカスタマイズした教育を行うしかない。このことは教員の負担を非常に増やすことになる。

一部の女子大学では心の性が女性であるトランスジェンダー学生の受入れを始めているが、相模女子大学の学生の気質を考えると、受入れは極めて難しいことが予測される。多くの学生は初め受け入れようとするだろうが、途中から自ら引いてしまう、すなわち登校困難者や休退学に陥ってしまう可能性が危惧されるのである。だから、身体的に女性である学生たちに、彼女たちがわかる内容でしっかりとしたジェンダー教育を施した後でないと、トランスジェンダー学生の受入れを行うことは難しいであろう。以上の点を考慮すると、相模女子大学は当面、伝統的な女子大学であり続けると予想される。

3. 相模女子大学の教育

さて、学校歴偏重、偏差値重視のわが国の社会において、どのような教育を行うことが学生たちの成長につながるのでしょうか。少人数教育は当然として、如何にして彼女たちに自信をつけさせるのが鍵である。相模女子大学のスローガン「見つめる人になる。見つける人になる。」というのは人材育成の肝である。

彼女たちの把握可能な範囲で何を見つめさせるのか。教員がそれを的確にできた時、彼女たちは自ら課題と解答をうまく見つけてくれるのである。学生たちにグランドデザインを考えてくれという注文は難しいが、教員がグランドデザインを構築して、それを細分化して提示すれば、細分化された内容については、純粹でまじめ、マイペースな性格を活かして、いろいろな気づきを得、解答を見つけ出す。

例えば、「ギッフェン財を挙げよ」という問いには解答できなくとも、「収入が増えると、価格が安くなっても買わなくなるものは？」という問いには、(パスタが好きな学生が)「学食のうどん」と答えてくれる。「修学旅行生はどうしたらモズクに関心を持つのか？」ではうまく答を引き出せなくても、「沖縄に出かけた修学旅行生はなぜモズクに無関心なのか？」と問えば、「美ら海水族館にモズクは展示されていないから」と答える。実際に美ら海水族館を訪問して確認すると、たしかにモズクの展示が全くなかった(2023年9月時点)。このような学生の観察力には舌を巻く。

教育の仕込みには時間がかかる一方で、1～2年に1度は教員が想定していなかった、それでいて本質を突く解答を返してくれるところが、相模女子大学生の面白いところである。20年間、相模女子大学で教育に携わる中で何度もこのような場面に出会うことがあった。このような経験は教員にも研究のアイデアを与えてくれる。学生たちがさまざまなことに好奇心さえ持ってくれば、学力があろうがなかろうが教員の方で学生たちを引っ張ることができる。だから、私は、コツメカワウソみたいな(少々飽きっぽいかもしれないが好奇心旺盛、マイペース、家族愛が強く、よく食べ、よく遊び、よく寝て、いまを楽しむ)学生に入学してもらいたいと常々思っている。

参考文献

- Coase, H.R. (1959) : 'The Federal Communications Commission,' *Journal of Law and Economics* 2, pp.1-40.
- Coase, H.R. (1960) : 'The Problem of Social Cost,' *Journal of Law and Economics* 3, pp.1-44.
- Tiebout, C. (1956) : 'A pure theory of local expenditures,' *Journal of Political Economy* 64 (5), pp.416-424.